

C 調査部門・報告Ⅱ・英語教育関連の調査・アンケートの実施と分析

## 高大連携を志向した日本人英語学習者の 基本動詞コロケーションの発達パターンのモデル化 — 学習者コーパスを使った研究 —

研究者:岡山県／岡山県立倉敷中央高等学校 教諭 堀家 利沙

《研究助言者:村木 英治》

### 概要

日本人学習者の英語コロケーション運用力の不足は広く知られるところであるが、この点についての対処を考える上では、高校生から大学生による産出を体系的、且つ一體的に分析し、コロケーション使用能力の発達過程をモデル化し、課題を解明した上で、教材や教授法の改善を図る必要がある。本研究は、汎用性の高いコロケーションパターンである基本動詞コロケーションを取り上げてこの問題を議論した。分析の結果、RQ1(学習段階と句動詞使用頻度の関係性)については、学習段階の上昇に伴い、句動詞使用頻度は着実に増加するものの、英語母語話者(以下ENS)と比較すると、大きく不足することが示された。RQ2(各学習段階を特徴づける句動詞と句動詞構成要素)については、高校生は限られた句動詞(go out, get along)を過剰使用する傾向が見られ、大学生になると学習段階が進み、使用種類数が増加するが、これらの傾向はENSの実際的な使用傾向とは乖離していることが明らかになった。その原因を探るために、句動詞を構成要素に分けて、対応分析を行った結果、特に不変化詞成分のコアイメージに対する学習者の理解不足がその一因となっていることが確認された。最後にRQ3(教科書における句動詞の扱い)については、頻度に不足はないが、種類の面から見ると、ENSが多用する句動詞(take on, come downなど)を十分に扱えておらず、その種類の偏りが学習者の句動詞使用にも影響していることが示唆された。これらの結果は、英語教材の改善や、英語教育における高大連携の進展

のための1つのヒントとなりうるものである。

### 1 はじめに

句動詞の起源は古英語時代にまで遡り、接頭辞付動詞(forgive, understandなど)が元とされている。その後、中英語時代以降に、「動詞+不変化詞」型の使用が徐々に拡大し、18世紀後期以降には、語義どおりの意味に限らず、比喩的な意味合いも持つようになった(Kennedy, 1920)。Bolinger(1971)は、句動詞の使用が広がった要因の1つとして、句動詞を構成する動詞の大半が一般的な単音節の動詞であり、それらの動詞は高頻度の限られた不変化詞のみと結びつく点を挙げている。現代英語において、句動詞は話し言葉に限らず、書き言葉においても頻度が高く、英語の文章を読む際に、平均すると150語当たりに1回は句動詞に遭遇する(Gardner & Davies, 2007)。また、Gardner & Davies(2007)は、句動詞は多義性が高く、British National Corpus(以下、BNC)に登場する全句動詞のうち約半数を占める高頻度句動詞100種はそれぞれが平均5.6種の異なる意味を持つことを明らかにした。つまり、句動詞は英語学習において鍵となり、句動詞を理解して、使う力が身につければ、同時に英語表現の幅も広がることが期待される。しかし、句動詞の習得は、日本人英語学習者にとって容易とは言えない。Liao & Fukuya(2004)は、学習者の母

語に句動詞という概念がない場合、回避傾向が見られ、その傾向は英語習熟度が低い方がより強いことを示唆している。また、Neagu(2007)も同様に、学習者はENSよりも句動詞の使用率が低く、動詞を単独で使うことが多いという傾向を指摘している。

では、教師は句動詞をどのように学習者に教えれば良いのだろうか。平成30年告示の高等学校学習指導要領で記載されている「連語」は、2つ以上の語が結びついて、あるまとまった意味を持つものを指している。つまり、「連語」には、句動詞も含まれているが、広義のコロケーションを意味していることがわかる。学習指導要領の中で、高校生に指導すべき新語数の目安は提示されているが、句動詞の指導については、何を、どのように教えるべきか教師の裁量に大きくゆだねられている。この点について、小屋・下山(2008)は、日本人英語教師はコロケーション指導に対する目標や指針を教師間で共有できていない可能性を示唆しており、中川(2018)は、教師は句動詞がなぜそのような意味になるのか理由を学習者に説明せず、意味のみを提示して暗記を促す場合が多いという指導上の問題点を指摘している。

そこで、本研究では句動詞指導方針を検討するために、日本人英語学習者の句動詞運用能力の実態を解明し、高等学校英語教科書における句動詞の扱いを調査する。

## 2 先行研究

### 2.1 句動詞の定義

句動詞に関する先行研究は多くあるが、本章では主に句動詞の定義に関するもの、日本人英語学習者の句動詞理解、及び使用実態に関するものに絞ってその概要を紹介することとする。

明らかに意味上の単位であること、3)自動詞である場合を除くすべての場合において、対応する受動態の形が存在すること、を挙げている。また、Quirk, Greenbaum, Leech, & Svartvik (1972)は、動詞は一語動詞と複数語動詞からなるとし、複数語動詞をさらに、句動詞(phrasal verbs)、前置詞付動詞(prepositional verbs)、前置詞付句動詞(phrasal-prepositional verbs)の3つに分類している。句動詞の場合、不変化詞は目的語となる名詞の前または後に置かれ、代名詞の場合は、不変化詞はその直後にしか置けない。つまり、句動詞の一例であるbring upは名詞を伴う場合、bring up a childのような語順になるが、代名詞を伴う場合、bring him upのように語順が変化する。一方で、前置詞付動詞の場合、不変化詞は必ず目的語となる名詞または代名詞の前に置かれる。例えば、前置詞付動詞の一例であるapply forは名詞を伴う場合、apply for the testのように、代名詞の場合も同様に、apply for itとなる。句動詞は目的語を取らない場合もあるが、前置詞付動詞は必ず目的語を取る必要がある点も違いの1つである。最後に、前置詞付句動詞は、catch up withのように3語からなるものを指す。本研究では、Quirk et al.(1972)の分類のうち、句動詞と前置詞付句動詞に焦点を当てる。したがって、学習者が多用するgo toのような前置詞付動詞は調査対象から除外したわけだが、除外理由はこの場合のtoは純粋な前置詞として使用されており、意味的な柔軟性が欠け、一語動詞と同様に一文中での移動が制限されるためである(Bolinger, 1971)。一例を挙げると、句動詞とは異なり、前置詞付動詞のgo toの場合、I go to school.を\*I go school to.のように書きかえることはできず、語順的制約を強く受けるため、これらの前置詞付動詞については、本研究の分析対象から除外した。そこで、本調査ではGardner & Davies(2007)で、BNCにおいて特に高頻度で句動詞のかたちを取るとされている動詞20種(break, bring, carry, come, find, get, give, go, hold, look, make, move, pick, point, put, set, sit, take, turn, work)と不変化詞16種(about, across, along, around, back, by, down, in, off, on, out, over, round, through, under, up)の組み合わせによる計320種を調査対象とし、網

羅的に検索を実行した。機械的に上記の組み合わせを検索した後、すべての用例を質的に観察し、句動詞と判断されたもののみを研究対象と見做している。例えば、work in Japan, given by my parentsなどは不変化詞が後の語を修飾し、句動詞としての使用ではないため、調査対象外とした。

## 2.2 日本人英語学習者の句動詞学習・使用の実態

学習者に焦点を当てた研究は、句動詞の理解度に着目した調査と使用実態に着目した調査に分けられる。Negishi, Tono, & Fujita (2012)は、高校生1,550名と大学生72名を対象に、句動詞理解度確認テストを実施し、Cambridge University Pressが提供しているEnglish Vocabulary Profile(以下 EVP)が句動詞に対して付与しているヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages: 以下 CEFR)に基づいたレベルの妥当性を検証している。調査の結果、kick outのように借用語になっている句動詞は、EVPによる分類ではB2レベルだが、学習者の正答率は高く、一方でleave behindのようにA2レベルでも教科書での出現率が低いものは正答率が下がることが明らかにされた。インプットではなく、アウトプットの側面に焦点を当てた研究としては、日本人英語学習者の話し言葉における句動詞使用実態を調査した石井(2018)が挙げられる。石井(2018)は、学習者の習熟度が上がるにつれて、句動詞使用頻度も上昇するが、上級者であっても使用する句動詞はENSと質的に大きく異なることを示唆した。また、飯尾(2013)では、日本人中高生と大学生の書き言葉を収集したコーパス分析から、日本人英語学習者は、中学・高等学校において学年が上がるにつれて、使用する句動詞の多様性が増すことが指摘されている。しかし、大学生になってもENSと比較すると句動詞使用頻度は依然として少なかったことが報告されている。以上の先行研究は多くの知見を明らかにしたが、学習者の学年・英語習熟度が句動詞運用能力にどのような影響を与えるのか調査し、学習者が使用回避する句動詞について、その回避理由を検証した研究は、管見の限りない。また、先行研究では、

複数の書き言葉コーパスを比較検討するうえで、学習者の句動詞使用に大きく影響しうる英作文のトピック統制がされていないという点についても変更の余地があると言える。そこで、本研究では高校生は学年ごとに、大学生はCEFRレベルに基づく英語習熟度ごとに、サブコーパスを作成し、学年・習熟度別に比較考察を試みた。使用する2種の英作文トピックは統制を行っている。また、英作文の中で、学習者による使用が見られない句動詞について、未習だから使えていないのか、既習だが定着していないのか、を教科書コーパスを用いて検証する。

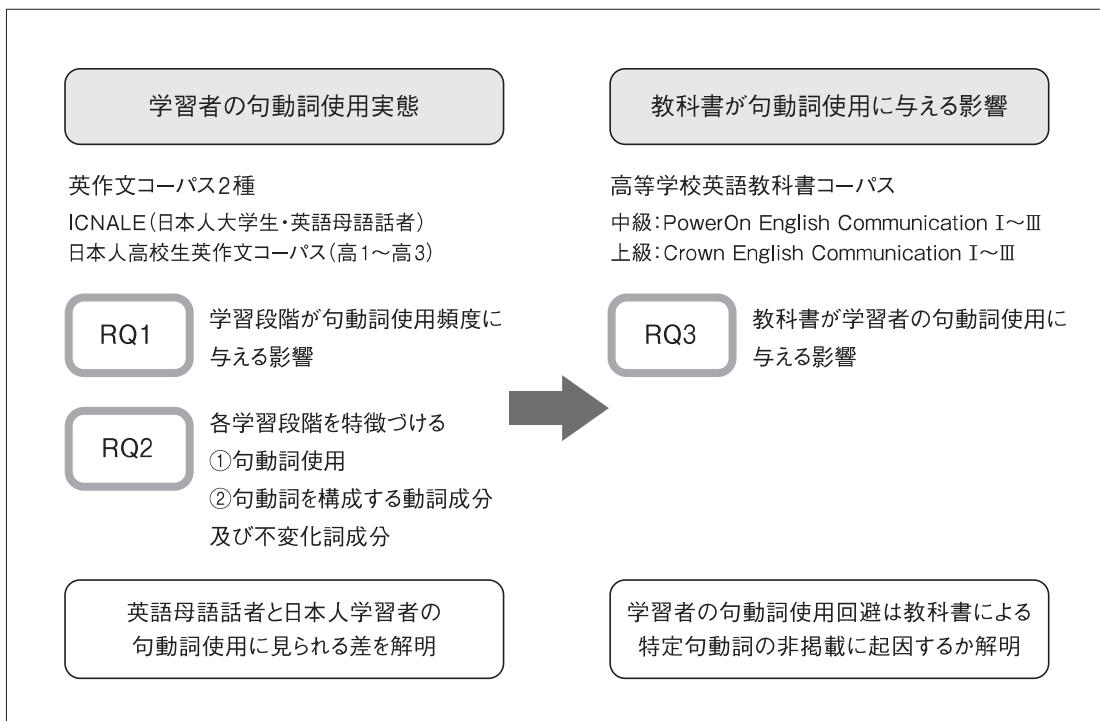
## 3 リサーチデザイン

### 3.1 研究目的

高校生から大学生による句動詞産出を体系的・一體的に分析し、基本動詞コロケーション使用能力の過程をモデル化し、関連する課題を解明した上で、教材や教授法の改善を図る、という研究の狙いに即して、日本人学習者の句動詞運用能力の実態と、高等学校英語教科書の句動詞の扱いについて調査するべく、3つの研究設問を立てることとした。本研究の前半部となるRQ1とRQ2は、日本人高校生・大学生、ENSによる英作文コーパスを使用し、学年・習熟度が句動詞運用能力に与える影響を調査することを目的としている。ここで、高校生は学年ごとに既習内容が大きく異なるという点で、同一基準で高校生と大学生をグループ分けすることは困難である点に留意されたい。まず、研究の前提として、学年と習熟度の概念のズレに関して、それらを包含する概念として「学習段階」という用語を新しく定義し、使用することとする。前章にて触れたGardner & Davies (2007)にて提唱されている動詞20種と不変化詞16種による組み合わせで構成される句動詞のみを分析対象とし、RQ1では句動詞使用頻度、RQ2では各学習段階を特徴づける句動詞と句動詞構成要素に焦点を当てることにした。最後に、RQ3では、中上級レベルの高等学校英語検定教科書2種をコーパス化し、教科書における句動詞の扱い

を調査する。その際に、RQ2の英作文コーパスの分析結果も併せて参考しながら、教科書の句動詞

使用頻度、種類数について検証する。以上、本研究の概略については図1を参照されたい。



■図1：本研究の流れ

RQ1 学習者の学習段階が進むと、句動詞使用頻度は増加し、ENSに近接するか。

RQ2 各学習段階の学習者及び、ENSを特徴づける句動詞並びに、句動詞構成要素はどのようなものか。

RQ3 学習者による特定句動詞の不使用は教科書での非掲載に起因するのか。

RQ1については、ENSと比較すると日本人英語学習者には句動詞使用回避傾向が見られ、英語習熟度が低い方が回避傾向は強くなる(Liao & Fukuya, 2004)ことから、学習者グループ内で、学習段階が上がるにつれて、句動詞使用頻度の緩やかな上昇が見られることが予測される。RQ2については、石井(2018)では、話し言葉における句動詞使用は英語習熟度の向上により、量的にはENSに近づくが、質的には依然として差が大きいと主張されていることから、書き言葉において

ても同様の現象が起きると仮定し、各学習段階を特徴づける句動詞使用が見られると予想できる。句動詞使用の特徴に加え、本研究では句動詞を動詞成分と不変化詞成分に分けて議論するという点で、これまでの先行研究とはやや異なる観点から学習者のつまずきポイントを検証する。句動詞を学習者が使用するためには、動詞成分と不変化詞成分のコアイメージを理解しておく必要がある。そこで、本研究ではあえて句動詞を分けて見ることで、句動詞を構成する2つの成分のうち、どちら側の理解に学習者は特に困難を抱え、その困難が句動詞使用の妨げとなっているのか調査する。Yasuda(2010)は、日本語の場合は、動詞自体が、英語の場合は不変化詞が中核的スキーマを持つことから、不変化詞が持つ意味に対する認識不足が日本人学習者の句動詞の理解を妨げていることを指摘している。よって、本研究においても同様に、不変化詞成分が句動詞使用のより大きな妨げとなっていることが可能性として考えられる。

本研究前半では、前述の2つの研究設問について俯瞰的に考察することで、「句動詞使用頻度」、「動詞成分の使用傾向」、「不変化詞成分の使用傾向」の3項目について、どの学習段階で「発達の節目」が見られるか検証する。発達の節目という用語は、幼児教育と小学校教育を合わせた9年間を一体として捉えて実施された神戸大学附属幼稚園・附属小学校(2018)の調査において、発達が見られるタイミングを指す言葉として使用されている。上述の研究では、子どもたちの発達は、学校教育制度上定められた学年の枠組みに従って見られるわけではないことが指摘されている。本研究で扱う句動詞運用能力についても、単に学年や英語習熟度の枠組みに従って、段階的に発達が見られるわけではなく、上述の3項目について、異なるタイミングで発達の節目が見られるのではないかと仮定し、検証を行う。

本研究後半で扱うRQ3については、教科書の中で特に高頻度の句動詞については学習が定着するが、頻度が中程度以下の句動詞は学習者の長期記憶に残らないのではないかと予測できる。Negishi et al. (2012)は日本人英語学習者を対象に句動詞100種について問うテストを実施し、句動詞が教科書に出現する頻度とテストにおける正答率の関係性について調査した。教科書における頻度は「なし」、「低」、「中」、「高」に分けられ、分散分析が実行された結果、「なし」と「高」の間では有意差が確認されたが、「なし」と「低」、「中」と「高」の間では有意差は確認されなかった。学習者の産出句動詞数は受容句動詞数よりも制限的であり、受容句動詞から産出句動詞に移行するまでにはより多くのインプットが必要になると予測される。そこで、RQ3では、教科書における句動詞の扱いを調査し、その傾向が学習者の句動詞使用にどのような影響を与えているか調査する。

### 3.2 使用したデータと分析対象句動詞

本節では、研究に使用されたコーパスの基本情報及び、分析対象とした句動詞について概括し、コーパス分析から得られたデータの分析手法に関して記述する。

#### 3.2.1 ICNALE Written Essays

神戸大学の石川慎一郎氏の主導のもと開発された本コーパスは、英語を第二言語または外国语として学ぶ学習者やENS、計2,800名を調査対象とし、意見主張型英作文データを収集した大規模英作文コーパスである。本研究では、その中から、ENS及び、日本人大学生のデータのみを使用することとした。研究協力者に与えられた英作文トピックは、「大学生のアルバイトの是非」、「レストランにおける全面禁煙の是非」の2種であり、20分から40分の制限時間内に、辞書などは使用せずに200語から300語の範囲内で英作文を作成することが求められた。すべての学習者には、TOEFLをはじめとした英語能力試験、またはNation & Beglar(2007)によって開発されたVocabulary Size Test(以下VST)のスコアから、CEFRに基づいて、英語習熟度情報が付与されている(Ishikawa, n.d.)。ICNALEの調査に参加した日本人学習者は、A2(154名)、B1(228名)、B2以上(18名)に分類されているが、B2以上の日本人英語学習者の数は極めて少ないため、本研究ではA2及びB1グループに属する計382名の日本人学習者を調査対象としている。また、比較対象となるENSのデータは3種の書き手(大学生、英語教師、社会人一般)ごとに小区分が存在するが、本研究ではこれらのデータをすべて合わせたENS(200名)のデータを使用する。

本コーパスにおいて英語習熟度を示す指標として採用されているCEFRは、日本で公開された当時は、ほぼ知られていなかったが、国が「CAN-DOリスト」の作成を各学校に求めるようになってから、日本でもこの指標の活用が広まり始めた(投野・根岸, 2020)。ちなみに、欧州評議会は一般的な書き言葉の産出について、A2レベルであれば、andやbutのような接続詞を用いて、単純なフレーズや文を書くことができ、B1レベルであれば、個別の要素を線状に繋げながら、学習者の関心のある分野について簡単なつながりのある文章を書くことができるという指標を示している(Council of Europe, 2001)。

#### 3.2.2 岡山・香川・兵庫高校生英作文コーパス(OKHコーパス)

本コーパスは、筆者が公立・国立・私立の高等

学校、計3校の協力を得て、2019年9月から2020年9月の約1年間で高1(計236名)、高2(計134名)、高3(計80名)の英作文データを収集し、作成した日本人高校生英作文コーパスである。各高等学校の授業進度にできる限り影響がない範囲で依頼したため、学年ごとにサンプル数に差が出ている点は留意したい。高校生グループについては英語習熟度別ではなく、学年別に見られる句動詞運用能力の差を見ることが本研究の目的であるため、生徒に英語能力試験の結果の提出は求めていらないが、得られた英作文のデータから判断すると、研究協力者の英語習熟度は主に、CEFRのA1レベル相当であることが推測される。各高等学

校の教師と生徒には研究の意義及び、目的を事前に説明し、同意を得たうえで、調査は実行された。英作文のトピックは統制し、ICNALEと同じ2種(「大学生のアルバイトの是非」と「レストランにおける全面禁煙の是非」)とし、辞書の使用は不許可とした。制限時間は20分から40分とし、語数制限は英語習熟度の差をかんがみて、50語から100語に設定した。生徒が手書きした英作文はすべて筆者が手作業でデータ化し、その過程で語数が制限の±10%を超えるものは、調査対象から除外した。以上2種のコーパスの基本情報に関しては、表1を参照されたい。

■表1: 英作文コーパス基本情報

ICNALE Written Essays		日本人高校生コーパス	
協力者	日本人大学生:計382名 A2(154名), B1(228名) ENS:計200名(大学生, 教師, 社会人)	協力者	国立・公立・私立の日本人高校生 高1(236名), 高2(134名), 高3(80名)
英文トピック	意見主張型英作文2種 A:大学生のアルバイトの是非 B:レストランにおける全面禁煙の是非	英文トピック	意見主張型英作文2種 A:大学生のアルバイトの是非 B:レストランにおける全面禁煙の是非
語数	200 ~ 300語	語数	50 ~ 100語
時間	20 ~ 40分	時間	20 ~ 40分
規則	辞書の使用は不可	規則	辞書の使用は不可
総語数	日本人大学生 A2:68,529語 B1:101,981語 ENS:90,613語	総語数	日本人大学生 高1:32,482語 高2:21,467語 高3:11,668語

### 3.2.3 高等学校英語教科書コーパス

RQ3では、検定済みの高等学校英語教科書のうち、研究協力者の英語習熟度とほぼ同程度と予想される中・上級レベルのコミュニケーション英語の教科書本文をコーパス化し、分析することにした。本研究では、中級レベルは東京書籍のPower On English Communication I ~ III、上級レベルは、三省堂のCROWN English Communication I ~ III(New Edition)を分析対象として選択した。櫻井(2018)は、出版社、及び難易度の異なる英語教科書6種を比較分析し、難

易度が中級レベルのPower On, My Wayと上級レベルのCROWN, Prominenceの間には、文数、文長(各文中の語数)にかなりの相違があり、使用される各種構文にも異なる傾向が見られることを明らかにした。また、出版社間で比較した場合、文数、文長、各種構文の3項目のうち、文長のみに関しては一定の相違が見られたことが報告されている。そこで、本研究では、難易度と出版社の異なる2種の教科書をそれぞれコーパス化し、調査を行った。

本研究では、高校生が高等学校3年間の英語の

授業の中で、教科書から得られる句動詞のインプット量について調査するため、2種の教科書データはまとめて、高等学校英語教科書コーパスとして使用された。コンコーダンサ AntConc を用いて、本研究で分析対象とした動詞20種と不変化詞16種の組み合わせにより、構成される句動詞を網羅的に検索し、英作文コーパスの分析結果と比較することで、日本人英語学習者の句動詞使用傾向と、教科書における句動詞出現傾向の関係性を概観した。

### 3.2.4 分析対象とする句動詞

本研究で、Gardner & Davies (2007) を基に、分析対象とする句動詞を決定した。Gardner & Davies (2007) は、イギリス英語を収集した総語数1億語からなるBNCを網羅的に分析し、高頻度句動詞及び、高頻度で句動詞を構成する動詞成

分、不変化詞成分について調査を行った。その結果、わずか20種の語彙動詞(break, bring, carry, come, find, get, give, go, hold, look, make, move, pick, point, put, set, sit, take, turn, work)が、BNC中に出現する全句動詞のうち、53.7%を構成していることが明らかになった。また、BNCにおける高頻度句動詞上位100位に入る句動詞はすべて、上述の語彙動詞20種と不変化詞16種(about, across, along, around, back, by, down, in, off, on, out, over, round, through, under, up)の組み合わせにより構成されており、これら100種の句動詞を習得すれば、BNC中に出現するすべての句動詞のうち、半数以上をカバーできることが示唆された。そこで、本研究では語彙動詞20種と不変化詞16種の組み合わせにより構成される計320種の句動詞を網羅的に検索することにする。



■図2：分析対象とする句動詞 ※ Gardner & Davies (2007) を基に、筆者が作成

### 3.3 手法

データは、すべて早稲田大学の Laurence Anthony 氏により開発されたコンコーダンサ、AntConc(バージョン:3.5.8)を利用して分析された。まず、RQ1では、句動詞使用頻度について各学習段階グループ間で差が見られるか検証するために、一要因参加者間分散分析が実行された。一要因分散分析とは、1つの要因内の3つ以上の条件の平均値を比較するための分析であり、その要因内のデータが異なる参加者から得られた場合、参加者要因と呼ばれる(小宮・布井, 2018)。

本研究においては学習段階という要因が、英作文における学習者1人当たりの句動詞使用頻度平均に及ぼす影響(主効果)を検証するため、一要因参加者間分散分析という手法が採用された。学習段階別グループは計6つあり、高校生:高1から高3、大学生:CEFRのA2からB1レベル、ENSという構成になっている。その後、事後検定としてHolm法を用いた多重比較を実施した。この方法は、有意水準の調整を行うことで、t検定を繰り返すことで生じ得る有意か否か誤った判断をする危険性を抑制する(小宮・布井, 2018)。

RQ2では、各学習段階を特徴づける句動詞使用

について調査した後、句動詞を構成する動詞成分、不変化詞成分に分けて、学習段階別に見られる特徴を検証する。まず、英作文において使用された句動詞種類数を学習段階別にグラフ化し、学習者が使用できる句動詞種類数にどのような推移が見られるか全体の傾向を観察する。次に、各学習段階を特徴づける句動詞について調査するためには、対応分析という手法が採用された。対応分析とは、頻度表における行と列の関係を組み替えることで、表に含まれる情報を少數の成分にまとめる目的とした分析手法であり、分類結果を散布図から視覚的に把握しやすいという利点を持つ(石川・前田・山崎, 2010)。そこで、句動詞使用の特徴については、第1アイテムを学習段階、第2アイテムを句動詞の粗頻度とする頻度表を作成し、対応分析を実施した。以上の手法に沿って、学習段階別に見られる句動詞の使用特徴を概観した後、句動詞を動詞成分、不変化詞成分に分けて分析を行うが、その際も同様に対応分析を実施し、特徴の観察を行った。第1アイテムを学習段階別グループ、第2アイテムを各動詞及び、不変化詞が句動詞を構成する頻度とし、それぞれに対応分析を実行し、結果の比較を行った。

最後に、RQ3では、以上の調査から得られた知見を踏まえて、レベルの異なる高等学校英語教科

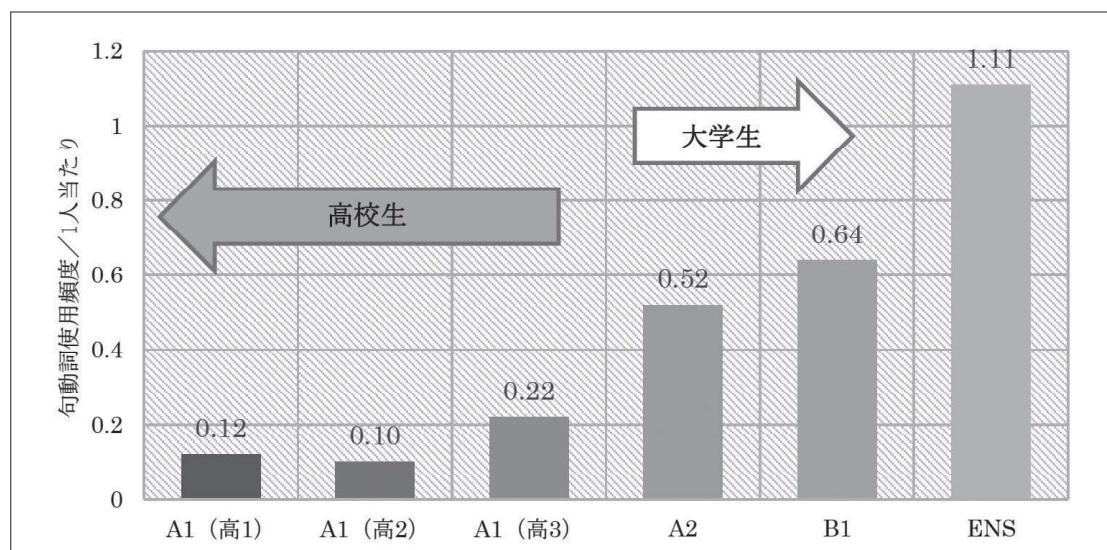
書2種について、本研究で分析対象とした句動詞320種を網羅的に検索し、教科書における句動詞の扱いを調査する。その結果を基に、英作文コーパスにおける学習者及び、ENSの句動詞使用と比較しながら、教科書で掲載されているにもかかわらず学習定着が進みにくい句動詞、及びENSは高頻度で使用するが、教科書における扱いが手薄となっている句動詞を解明する。

## 4 結果と考察

本節では、分析から得られた結果を研究設問ごとに、考察と併せて報告する。

### 4.1 RQ1: 学習段階と句動詞使用頻度の関係性

高校1年生から高校3年生にかけて、さらにはA2(大学初中級学習者)、B1(大学中級学習者)にかけて、句動詞使用頻度が安定的に増加し、最終的にはENSの句動詞使用量に到達しているかどうかを確認するため、段階別の句動詞使用量(1人当たり平均値)を調査したところ、以下の結果が得られた。



■図3: 学習段階別に見た1人当たりの句動詞使用頻度の平均(トーカン)

グラフからは、高1と高2の間でわずかな減少が生じているものの、高校から大学にかけてお

よそ増加傾向が存在するように見える。また、B1とENSの間にもかなりの差があるように見受け

られる。以上の2点について検証するために、学習段階の異なる5群、及びENSにおける1人当たりの句動詞使用の平均値を一元配置の参加者間分散分析で検定した結果、学習段階の主効果が認められた( $F(5,974)=38.990, p<.001$ 、モデル効果量  $\eta^2=.173$ )。続けて、学習段階別グループごとにHolm法による多重比較を行った結果、ENSの句動詞使用頻度は大学生B1グループよりも有意に高いことがわかり、中程度の効果が確認された( $d=.559$ )。日本人英語学習者グループ間では、統計的な有意差は見受けられなかったが、A2と高3間には小程度の効果が確認された(効果小: $d=.370$ )。以上の結果を概観すると、学習段階が低い学習者ほど句動詞使用回避傾向は強く、その傾向は学習段階が上がるにつれてやや弱まるが、ENSとの差は依然として大きいことがわかる。Liao & Fukuya(2004)は、中国人英語学習者を対象とした調査を実施し、学習者の母語に句動詞の概念がない場合は、句動詞の使用回避傾向が見られ、その傾向は英語習熟度が低いほど強いという傾向を指摘したが、この傾向は、本調査の結果から日本人英語学習者についても当てはまり、仮説は支持された。

ここで議論すべき点は2点ある。1点目は、なぜ高等学校3年間の学習を通して、句動詞使用頻度が増えなかつたのかということである。2点目は、なぜB1(大学中級学習者)であっても、ENSの句動詞使用量に至らなかつたのかという点である。まず、1点目については高等学校の英語授業の中では、句動詞指導にはほぼ重点が置かれていない現状が挙げられる。一般的に、高等学校において、生徒、及び教員は単語の重要性は十分に理解している。そのため、単語帳を1人1冊購入するように推奨し、範囲を決めて、定期的に単語テストを実施するなど、単語力の拡充を体系的に行っている例は少なくない。一方、句動詞となると、熟語の範疇で扱われることが多いが、句動詞の指導が授業時間内において明示的に行われることはほぼなく、高校生の視点から考えても、句動詞を意識して学習する機会は極めて少ない。教科書において、句動詞が仮に出現したとしても、平易な動詞と不変化詞から構成されていることから、その難しさが意識されづらく、結果として指導の中で句動詞に重点が置かれず、高校生が十分に理解で

きていなければ、教師がそれに気づかぬまま、授業を進行してしまう可能性も高い。以上の理由から、高等学校3年間の英語学習を経ても、なかなか句動詞の重要性に対する意識が高まらず、その結果、句動詞使用量も伸び悩んだと考えられる。

2点目については、大学生が主に得られる英語のインプットの質に偏りがある可能性が考えられる。句動詞は一般的に、くだけた場面で使用されることが多いが、大学生が日々の英語学習や専門分野の研究の中で触れる英語は、学術的な内容が中心となることが多い。学術分野の英語で使用される句動詞の頻度や種類数は制限的であり、なお且つ大学生が比較的くだけた英語や話し言葉などに接触する機会は一般的に少ないため、実際の英語コミュニケーションにおいて頻繁に使用される句動詞の全体像を把握する上で、必要となるインプットを十分に得られていない可能性が示唆される。これが一因となり、B1(大学中級学習者)であっても、ENSの句動詞使用頻度とは乖離が見られると推測できる。

最後に、句動詞使用頻度について、どのタイミングで発達の節目が見られるか考察する。上述のとおり、日本人英語学習者グループ間で統計的有意差はなかったが、高3とA2間には小程度の効果が確認されたことから、このタイミングで最初の発達の節目があると言える。本研究では、高校生グループは学年、大学生グループはCEFRレベルによる英語習熟度という異なる尺度でグループ分けをしているため、2種のデータを連続的に見ることは難しい。しかし、先行研究による調査結果をもとに、高校3年生の英語習熟度の目安から、発達の節目をある程度推測することはできる。文部科学省(2017)が実施した英語力調査では、高校3年生のライティング力について約8割がCEFRのA1レベルであったことが報告されている。この結果をもとに、本調査に協力した高校生の大半の英語ライティング力がA1以下だと仮定すると、句動詞使用頻度における発達の節目はA1/A2間にあり、A2以降は句動詞頻度の増加は横ばいになることが推定される。

以上、RQ1では、学習段階と句動詞頻度の関係性を調査し、A1(高3)とA2(大学初中級学習者)の間には、変化のトレンドの線形性にややズレ

があることから、わずかな発達の節目が確認されるが、英語習熟度が比較的高い大学生であってもENSの句動詞使用量との間には依然として大きな差が見られることが明らかになった。しかし、ここでは句動詞の全体的な使用量を見ただけで、個々の学習者及び、ENSが、具体的にどの句動詞をどの程度使用したかは明らかにされていない。この点については、RQ2で検討することとする。

#### 4.2 RQ2:各学習段階を特徴づける句動詞と句動詞構成要素

RQ1により、日本人英語学習者の句動詞使用量は、高校3年間では目立った増加がなく、最初の発達の節目はA1(高3)とA2(大学初中級学習者)間で見られるが、B1(大学中級学習者)と

ENSの間に見られる差は依然として大きいことが確認された。しかし、各学習段階別グループにおける個別の句動詞使用特徴は明らかにされていない。そこで、本節では学習段階別に句動詞使用種類数の推移を観察し、各段階において特徴的に使用される句動詞、及び句動詞構成要素について報告する。

##### 4.2.1 各学習段階を特徴づける句動詞

まず、動詞20種、不变化詞16種の組み合わせにより構成される句動詞を網羅的に検索した後、質的に用例を観察しながら、句動詞ではないものを除去して、各学習段階において、使用が見られた句動詞の種類数をグラフ化すると、下記の結果が得られた。

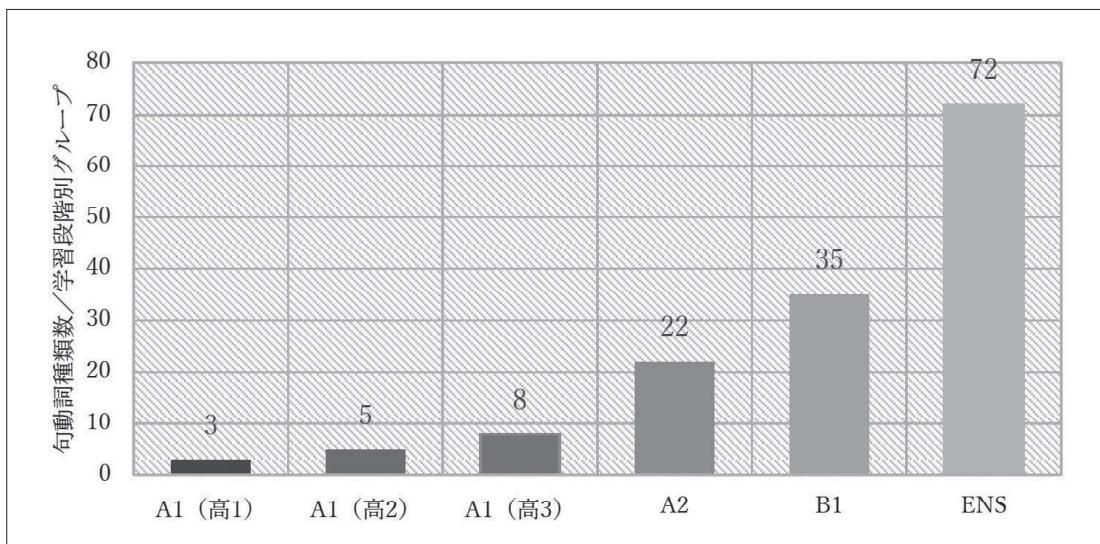
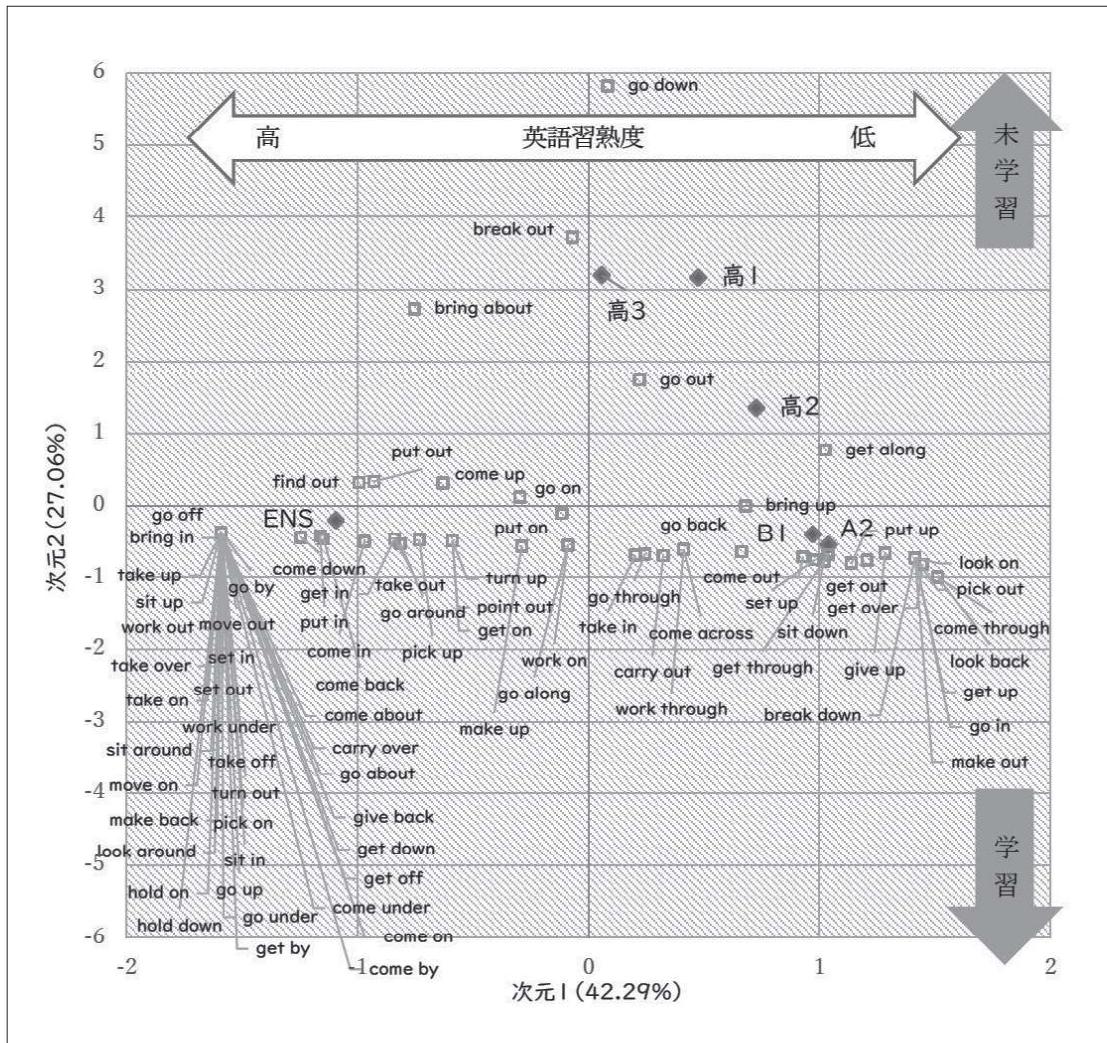


図4: 学習段階別に見た各グループの句動詞使用種類数(タイプ)

図4より、学習段階が上がるにつれて、句動詞種類数も全体的に増加傾向にあるものの、A1(高3)とA2(大学初中級学習者)、B1(大学中級学習者)とENSの2か所で増加傾向の線形性にズレが確認できる。そこで、高校生群と大学生群に分けて、句動詞の異なり語数(タイプ)を調査すると、高校生群は12種、大学生群は43種であることがわかった。ENSを基準として比較すると、高校生はわずか8.6%、大学生は30.9%の種類の句動詞しか使いこなせていないことが明らかになった。

以上の結果より、日本人英語学習者の句動詞使用種類数を見ると制約的であると言えるが、各学習段階において使用される個別の句動詞からは、どのような段階別の特徴が確認されるだろうか。図5は、学習段階別に作成した句動詞の頻度表を基に、対応分析を実行した結果である。



■図5：句動詞の対応分析結果

解析の結果、5つの次元が抽出され、第2次元までの累積寄与率は69.35%であった。図5は、出力された散布図である。まず、横軸から焦点を当てると、図の左側に移行するにつれて、ENSの句動詞使用傾向に近付くと言えそうだ。だが、日本人英語学習者群を見ると、学習段階が上がるにつれて、段階的にENSに近付く構図にはなっていないことがわかる。ここで、縦軸も併せて見ると、図中の上から下に向かって、学習者の場合は、未学習から学習へ移行していると考えられる。

では、ここからは各学習段階を特徴づける句動詞について概観したい。まず、第1象限にプロットされている高校生群に焦点を当てると、句動詞を構成する動詞成分、不変化詞成分が持つ個々の

意味から句動詞全体の意味を比較的推測しやすい`go out`や`go down`、及び教科書や参考書において頻出のイディオム性が高い句動詞`get along`が特徴的句動詞として挙がっている。高校生群を特徴づける句動詞はわずか3種のみであり、高校生の句動詞知識が制限的であることが示唆されると同時に、他の学習段階別グループにおいても高頻度である`go out`が第1象限にプロットされていることから、高校生は下記の用例のように限られた既知の句動詞を過剰使用する傾向があることが示唆されている。

- (1) Second, if they part-time get money, they can go out with their friends and enjoy a lot things.(高1公立\_PTJ)

(2) People of smoking had better go out than they smoking in the restaurants.(高2私立\_SMK)

(3) For example, they can go out lot of different places and eat delicious food by it. (高3 公立\_PTJ)

高校生群について学年別にプロット位置を見ても、段階的に図中の左または下に移行するわけではないことから、学年間で明確な発達の節目は見られないと推測できる。

次は、第4象限にプロットされている大学生群(A2, B1)に着目する。大学生群が高校生群と異なる象限にプロットされた理由としては、受験勉強や専門分野における英語の使用などを経て、インプットの質と量が変化し、学習が進んだからだと考えられる。大学生群では、借用語(set up, give up)や比較的意味透明性が高い句動詞(get through, come across, take inなど)が目立ち、下記の用例のように、主に人を主語として、その行為を説明する句動詞(put up, give up, sit downなど)が特徴句動詞として挙がっている。

(4) I always think that smokers should put up with smoking while they are in a restaurant.  
(B1\_SMK)

(5) Smokers will give up smoking at restaurants. (B1\_SMK)

(6) So he wants to sit down a seat that people can smoke in restaurants. (B1\_SMK)

全体として、高校生群と比較すると、種類数には増加が見られるものの、ENSとは依然として異なる象限にプロットされていることから、大学生によって優先的に学習されている句動詞とENSが多用する句動詞との間には、差が見られる可能性が高い。

最後に、第3象限にプロットされているENS群を概観すると、圧倒的に他群よりも多様性に富んでいることがわかる。その中には、下記の用例のように句動詞の意味的な透明性が低く、句動詞を構成する動詞成分と不変化詞成分が持つコアイメージを十分に理解していなければ、全体の意味を推測することが難しい句動詞(work out, pick on, take upなど)も多く見られる。

(7) It has worked out for me and I have also

learned a lot from my two bosses. (ENS\_PTJ)

(8) Based on those facts alone, it is difficult to see how smokers feel so offended and picked on. (ENS\_SMK)

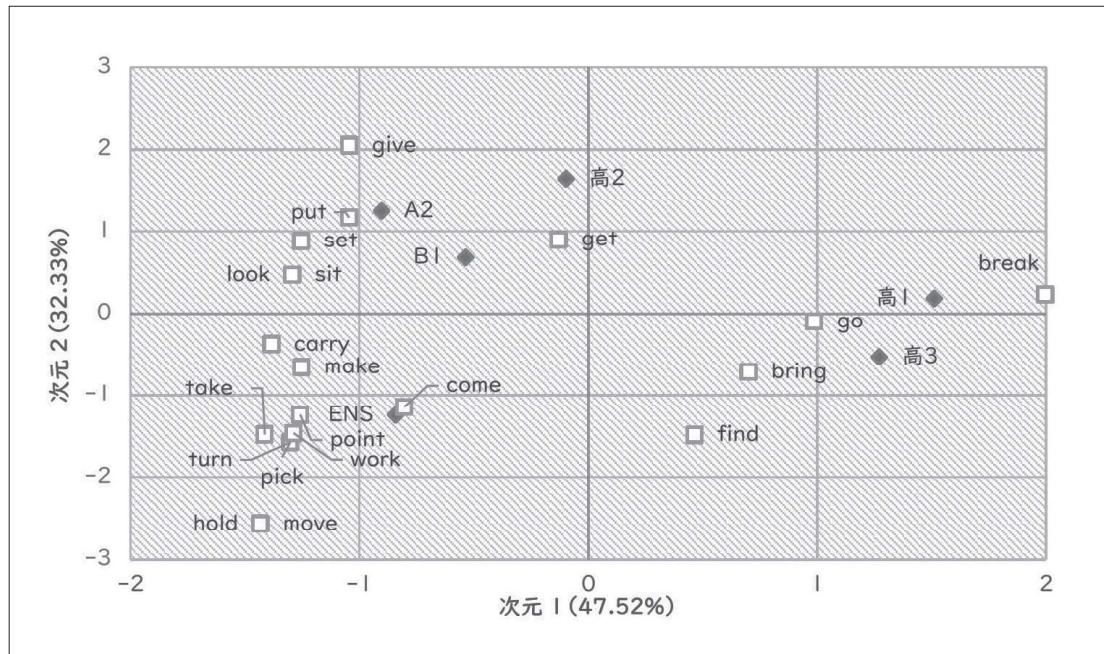
(9) Even though the harmful effects of smoking, both directly and passively, are well known and undeniable, more and more young people are taking up the habit. (ENS\_SMK)

以上の結果より、日本人英語学習者の句動詞使用の特徴について2点、明らかになった。まず、1点目として、高校生は既習の限られた意味透明性が高い句動詞、及び教科書や参考書で頻出のイディオム性の高い句動詞を過剰使用する傾向が見られた。2点目として、大学生になると、「学習型」句動詞が増加し、学習者の中では上級化が進むが、ENSが多用する「実用型」句動詞とは傾向が異なることが明らかになった。

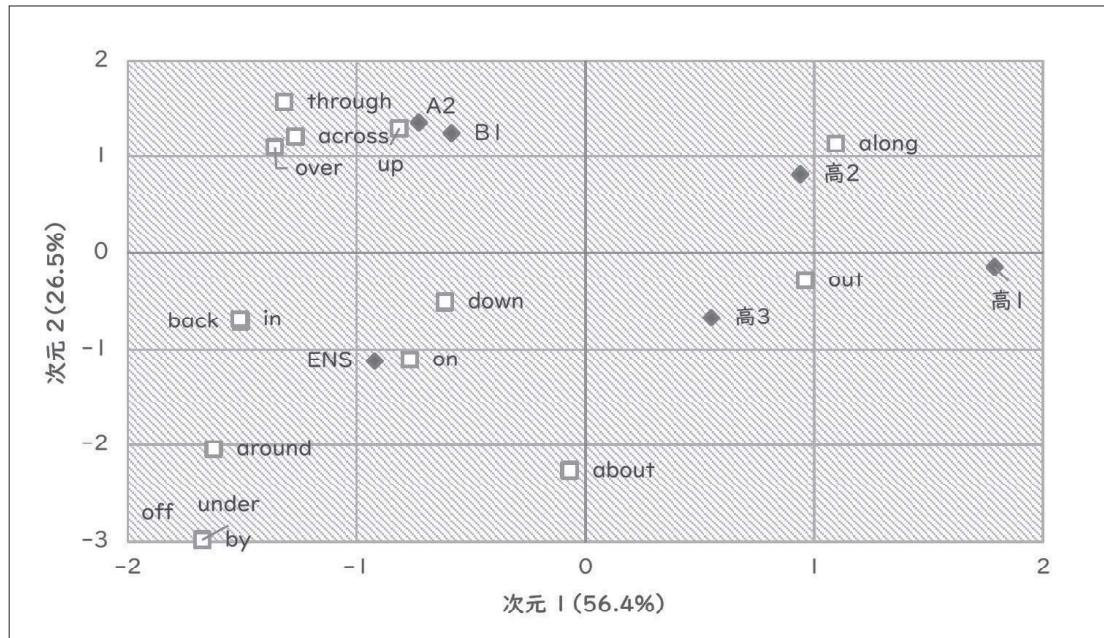
だが、中級学習者になっても、句動詞使用傾向がENSと大きく異なる理由については十分に考察できていない。既に述べたとおり、句動詞は、平易な動詞成分と不変化詞成分から構成される訳だが、特定の動詞、または不変化詞が持つコアイメージに対する学習者の理解不足が原因となって、学習者の句動詞使用が制限的になっているという可能性はないだろうか。そこで、次節では句動詞の構成要素について個別に分析を行い、各学習段階別にどのような特徴が見られるか考察する。

#### 4.2.2 各学習段階を特徴づける句動詞構成要素

本節では、句動詞を構成する動詞成分と不変化詞成分について個別に対応分析を実施した結果を報告する。まず、動詞成分について対応分析を行った結果、5つの次元が抽出され、第2次元までの累積寄与率は79.85%であった(図6)。同様に、不変化詞成分についても解析を行った結果、5つの次元が抽出され、第2次元までの累積寄与率は82.9%となった(図7)。



■図6: 基本動詞成分の対応分析散布図



■図7: 不変化詞成分の対応分析散布図

図6, 7に関して、まず注目すべき点は、第1次元の寄与率であり、両者を比較すると、動詞よりも不変化詞の方が、8.8%高いことがわかる。この結果は、不変化詞が持つコアイメージに対する学習者の理解不足が、句動詞習得を妨げる一因であることを示唆していると言える。どちらの結果

においても、ENSは日本人英語学習者グループとは異なる次元にプロットされていることから、ENSと学習者間に見られる使用傾向の差は大きいことがわかる。

次に、句動詞を形成する動詞成分と不変化詞成分における発達の節目について考察する。散布

図を見ると、両者とも図中の右側から左側にかけて英語習熟度がより高くなっていくという全体的な傾向が認められる。だが、動詞成分と不変化詞成分を個別に見ていくと、両者の発達の節目には異なる特徴が見受けられる。まず、動詞成分に焦点を当て、高校生群全体を俯瞰すると、学年が上がるにつれて左側へと順にプロットされる位置が移行するわけではないことから、学年間で明確な発達の節目が見られるとは言い難い。以上の結果から、動詞成分の発達の節目については、高校生の学年間ではほぼ見られず、主にgo, getを含む句動詞の使用が中心であることがわかる。次に、高校生群と大学生群を比較すると、動詞成分の使用傾向の差がわずかに見受けられ、大学生になるとgive, look, put, set, sitを構成要素として含む句動詞の使用も見られることから、小さな発達の節目が確認できる。だが、ENS群が位置する第3象限にプロットされているcarry, come, hold, make, move, pick, point, take, turn, workを含む句動詞については、学習者は十分に使えていないと言える。

一方で、不変化詞成分については、高校生群の学年間にも明確な発達の節目が確認でき、高校生と大学生は各々異なる次元にプロットされていることから、両グループ間でも大きな発達の節目があると推定される。ここで、各学習段階グループを特徴づける不変化詞を個別に見ると、高校生群を特徴づける不変化詞はoutとalongのみで、かなり制約的である一方で、大学生になるとthrough, across, over, upなども句動詞の一部としての使用が見られ、種類数にやや広がりが見受けられる。次に、ENSを特徴づける不変化詞成分を見ると、about, around, back, by, down, in, off, on, underが挙げられる。この中で、downとonについては、中心点から比較的近いことから、日本人学習者による使用も見られるが、ENSと比べると使用範囲が限られ、頻度も伸び悩んでいることが示唆される。その他の不変化詞については、学習者グループ内では、句動詞を構成する頻度が圧倒的に少ない、または皆無である。Gardner & Davies(2007)は、8種の不変化詞(out, up, on, back, down, in, over, off)は、本研究で分析対象とした基本動詞20種と組み合わざり、特に高頻度で句動詞を形成し、BNCで見ら

れる句動詞の半数以上を占めることを報告した。つまり、ENSを特徴づける計9種の不変化詞のうち、on, down, in, back, offは高頻度で句動詞を形成する重要度の高い不変化詞であるため、まずはこれらの不変化詞のコアイメージを学習者に對して、明示的に指導することが学習者の句動詞運用能力の発達を促進するための指導上の要となると考えられる。

以上、RQ2の調査結果より、3点示唆された。まず、1点目として、句動詞使用について高校生は限られた既習の句動詞を過剰使用する傾向が強く、それらの句動詞は意味的透明性が高いもの、及び教科書や参考書で頻出のイディオム性が高いものが中心となっていることが明らかとなった。次に、2点目として、大学生になると学習の積み重ねにより、使用できる句動詞種類数は増加するが、これらはENSが多用する句動詞の傾向とは乖離していることがわかった。最後に、3点目として、学習者とENS間の句動詞傾向における差を生み出している要因は、特に句動詞を構成する不変化詞成分側に対する学習者の理解不足にあり、ENSが句動詞の構成要素として多用する不変化詞のうち、特にon, down, in, back, offのコアイメージに対する理解が不足している可能性が示唆された。

RQ2では、学習が進むにつれて使えるようになる「学習型」句動詞とENSが多用する「実用型」句動詞の間には傾向の差が見られた訳だが、高校生が得られる英語のインプットとして中心的な役割を果たす教科書では、句動詞はどのように扱われているのだろうか。この点について、RQ3で検証することとする。

### 4.3 RQ3:教科書出現頻度と学習者の句動詞運用能力の関係

本節では、中上級レベルの高等学校英語教科書2種を併せて、教科書コーパスとして分析し、教科書ではどのくらいの頻度で句動詞が出現するか、またENSが多用する句動詞がどの程度反映されているかを調査した。

まず、教科書コーパス内で分析を実施したところ、句動詞種類数は52で、頻度合計は122となった。ここからは、以上の結果を基に、教科書出現句動詞と英作文においてENSが使用した句動詞を頻

度と種類の観点から比較する。句動詞の出現頻度に関しては、ENS 英作文では500語当たり1.2回句動詞が出現するのに対し、教科書では1.5回出現することから、教科書の句動詞使用頻度の方がやや高く、学習者が句動詞を目にすることの機会は十分に与えられていることがわかった。だが、教科書に出現が見られたとしても、学習の定着に直結する訳ではなく、教科書には出現しているが、英作文の中で日本人英語学習者群の使用が見られなかった句動詞(take up, work out, move out)も存在する。これらの句動詞を学習者が使用できなかった理由として、教科書における出現頻度が1回のみであり、その頻度の低さから学習の定着に至らなかった可能性が示唆される。だが、同じく頻度1の go outについては、高校生の英作文においても高頻度で使用が見られたことから、上述の3種の句動詞に対する使用回避傾向の裏には、教科書における出現頻度の低さ以外の理由も考えられる。Folse(2004)は、句動詞が多くの英語学習者を悩ませる一因として、句動詞の意味の不明瞭さを指摘し、throw upを例として挙げている。この句動詞を構成する動詞 throw、不変化詞 up はともに、初級レベルの英語学習者にとっても比較的馴染みのある語と言える。だが、それらの個別の意味を合わせて、句動詞全体の意味を推測することは容易ではない。本調査において、教科書での出現が見られるにもかかわらず、学習の定着が不十分だった句動詞は、Folse(2004)が例に挙げた throw up と似た特質を強く持つ句動詞が多いと考えられる。

例えば、句動詞 take up は、RQ1, RQ2で使用した ICNALE のデータに立ち戻ると、ENS の英

作文における粗頻度は7回であった。用例を観察し、『三省堂 英語イディオム・句動詞大辞典』を参照しながら、意味タグを付与した結果、「(仕事を)始める」(頻度3)という意味での使用が最も多く、次に「(時間などを)取る」(頻度2)、「(問題などを)取り上げる」(頻度1)、「(注意・心などを)すっかり向けさせる」(頻度1)という意味での使用が見られた。以上の結果から、ENS は take up を「(仕事を)始める」という意味で最も多く使用していることがわかるが、この句動詞を構成する動詞成分の take と不変化詞成分の up が持つ個別の意味から、「(仕事を)始める」という句動詞全体の意味を推測することは容易ではない。

また、教科書において出現した句動詞を授業内で教師がどの程度、明示的に指導しているかという問題点もある。上記の3種の句動詞のうち、work out に焦点を当てるに、ENS は英作文において計7回使用しており、そのうちの約85%は「うまくいく」という意味の使用であった。教科書における work out の使用例を見ると、ENS と同様「うまくいく」という意味で使用されているにもかかわらず、定着しなかった理由は何だろうか。Nassaji(2003)は、学習者が英語の文章中に出現する単語の大半を知っている状態で、知識やストラテジーを駆使して、文脈から一部の未知の語の意味を推測したとしても正しく推測できる可能性は低く、わずか25.6%だったことを指摘している。つまり、句動詞は学習者にとって比較的馴染みのある語の組み合わせによって構成されているものの、明示的指導なしで、学習者が文脈からその意味を正しく推測し、使用できるようになる

■表2: 教科書掲載のないENS多用句動詞

句動詞	ENS 頻度	句動詞	ENS 頻度
take on	14	put out	3
come down	8	put on	3
put in	6	pick on	3
hold down	5	go off	3
point out	4	go about	3
move on	4	carry over	3
get on	4		

可能性は極めて低いと言える。句動詞が教科書の新出語彙・表現欄に挙がることは稀だが、ENSの使用頻度が高く、意味推測が難しい句動詞は、学習者に明示的に指導する必要性が高い句動詞だと言える。

次に、教科書に出現する句動詞の種類数に焦点を当てると、ENSが英作文で使用した全句動詞のうち、教科書で扱われているものは半数弱の47.8%にとどまることから、句動詞を個別に見るとENSが高頻度で使用し、重要度が比較的高い句動詞の一部が教科書には出現しない可能性も示唆される。表2は、英作文中でENSは多用(粗頻度:3以上)したが、教科書における掲載はない句動詞である。

上表の教科書掲載のない句動詞は、RQ2で句動詞頻度を基に実施した対応分析の結果、すべてENS群を特徴づける句動詞として挙がっていることから、未学習であるゆえに、学習者が十分に使用できていないことが推測される。また、同じくRQ2で句動詞を構成する動詞成分と不変化詞成分に分けて実施した対応分析の結果から、動詞成分(carry, come, hold, make, move, pick, point, take, turn, work)、不変化詞成分(about, around, back, by, down, in, off, on, under)はENS群を特徴づけることが明らかとなったが、これらを踏まえて表2の教科書掲載なしの句動詞を概観すると、いずれかの成分を含む句動詞が、リスト全体の9割以上を占めることがわかる。つまり、これらの動詞成分と不変化詞成分により構成される句動詞の扱いが、教科書で特に手薄となっている可能性が示唆される。

本節の教科書分析を通して、以下の2点の課題が明らかになった。まず、教科書における句動詞頻度は、実際のENSの句動詞使用量と同程度であるが、教科書出現頻度が低く、なお且つ意味的透明性も低い句動詞については、明示的指導をしなければ、学習の定着に直結しない可能性が高い。2点目として、教科書で選好して使用される句動詞の種類にはやや偏りが見られ、教科書から得られる句動詞のインプットだけではENSが高頻度で使用する重要句動詞を十分にカバーできていない可能性が示唆される。この点については、教科書における扱いが手薄となっている句動詞(表2)を踏まえた上で、重要句動詞をリスト化し、補

助教材として指導の中に組み込んでいく必要性もありそうだ。

## 5

## 結論と今後の課題

本研究では、3つの研究設問を通して、英作文分析から見た日本人英語学習者の句動詞運用能力の発達と、高等学校英語教科書における句動詞の扱いを調査した。RQ1では、320種の句動詞を網羅的に検索し、学習段階と句動詞使用頻度の関係性を調査した。その結果、B1(大学中級学習者)とENSの句動詞使用頻度は統計的に差が有意であることがわかった。また、高校生群と大学生群の間では、頻度変化のトレンドの線形性にややズレが見られたことから、この段階で小さな発達の節目が見られると推測される。次にRQ2では、学習段階別に見られる句動詞種類数の推移を概観した後、各段階を特徴づける句動詞、及び句動詞の構成要素を抽出した。学習段階別に具体的な句動詞使用の特徴に着目すると、高校生は意味的透明性が高い句動詞(go out)や教科書や参考書において頻出のイディオム性が高い句動詞(get along)を過剰使用する傾向が強く、その傾向は英語習熟度が上がるにつれて徐々に弱まることが明らかとなった。大学生になると、受験勉強や専門分野における英語の使用などを通して学習が進み、使用できる句動詞は増加するが、これらのが「学習型」句動詞(put up, look backなど)はENSが多用する「実用型」句動詞(work out, move onなど)とは傾向が乖離していることが示唆された。以上のような傾向の差を生み出す要因を検証するために、句動詞を構成する動詞成分と不変化詞成分に分けて、学習段階別に見られる特徴を調査した結果、不変化詞が持つコアイメージに対する学習者の理解不足がその主因となっていることが判明した。学習者の句動詞運用能力の発達のためには、高頻度で句動詞を形成するものの、学習者が十分にコアイメージを理解できていない不変化詞(back, down, in, off, on)に特に重点を置き、視覚的にコアイメージを把握できるように、指導していく必要がある。最後にRQ3では、以上の知見を踏まえて、高等学校英語

教科書における句動詞の扱いを調査した。教科書出現句動詞と英作文においてENSが使用した句動詞の比較を行った結果、句動詞出現頻度は同程度であり、ENSが使用した全句動詞のうち、47.8%は教科書に掲載されていることが明らかになったが、教科書出現があったとしても、頻度が低く、句動詞の構成要素が持つ個別の意味から全体の意味を推測することが難しい句動詞は明示的指導がなければ、学習の定着に直結しない可能性が示唆された。これらの句動詞については、データ駆動型学習を取り入れながら、学習者ができる限り多くの用例に触れ、前後文脈から句動詞の意味だけでなく、使い方に自ら気づく機会を提供する必要がありそうだ。また、ENSが多用するにもかかわらず、教科書での扱いが手薄となっている句動詞(take on, come downなど)も存在することから、これらの句動詞はリスト化し、補助教材として指導の中に組み込むなどの工夫が求められる。

本研究では、以上のとおり高校から大学にかけて、学習段階の上昇とともに確認される句動詞運用能力の発達について一體的、且つ体系的に把握し、教科書における句動詞使用実態を報告した。これらの調査結果が、高大を通して句動詞指導を行う上での1つのヒントとなることを願う。

しかし、本調査では句動詞の多義性については調査できておらず、個別の句動詞に着目し、学習段階が上がるにつれて、どのように多義的に使用範囲の広がりを見せるかについては、今後さらに検証を重ねる必要がある。また、学習者コーパスの分析を通して、日本人英語学習者の句動詞運用能力の発達と学習段階との関係性は調査できたが、英作文において学習者が使用しなかった句動詞は、単に理解は可能だが、産出レベルにまでは達してなかったのか、それとも理解も難しい句動詞なのかについては、確認できていない。今後、句動詞理解度テストなどを取り入れながら、学習者の句動詞理解度を検証していくことも求められる。また、RQ3では教科書の句動詞使用を英作文におけるENSの句動詞使用と比較したが、英作文のトピックは2種のみに制限されており、使用されている句動詞の使用傾向についてもENS全体の傾向を反映したものとは言い難い。そこで、大規模のENSコーパスを使用し、学習者に優先

的に指導すべき句動詞を抜粋し、リスト化した上で、用例とともに示していくことが今後、引き続き研究を進めていく上での課題となる。

### 謝辞

本研究を実行する機会を与えてくださった公益財団法人 日本英語検定協会、ならびに、激励のお言葉やご指導をいただいた助言者の村木英治先生に、心より御礼申し上げます。また、ICNALEの開発者である神戸大学の石川慎一郎教授には、自作の高校生コーパスを作成する際に貴重なご助言を賜り、論文完成まで親身にご指導いただいたこと、厚く感謝申し上げます。本研究は、快く研究にご協力くださった3校の先生方、生徒の皆様のお力添えのおかげで、完遂することができました。重ねて感謝申し上げると同時に、今後もこの貴重なデータを生かして、教育現場に少しでも還元できるよう、研究に精進いたします。

## 参考文献

- (\*は引用文献)
- \* Bolinger, D. (1971). *The phrasal verb in English*. Harvard University Press.
  - \* Council of Europe (2001). Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment. Council of Europe.
  - \* Folse, K. S. (2004). *Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching*. The University of Michigan Press.
  - \* Gardner, D., & Davies, M. (2007). Pointing out frequent phrasal verbs: A corpus-based analysis. *TESOL Quarterly*, 41(2), 339-359.
  - \* Ishikawa, S. (n.d.). About ICNALE: Retrieved from ICNALE: The International Corpus Network of Asian Learners of English websites; <http://language.sakura.ne.jp/icnale/index.html#0>, on February 19, 2021.
  - \* Kennedy, A. G. (1920). *The modern English verb-adverb combination*. Stanford University.
  - \* Liao, Y., & Fukuya, Y. J. (2004). Avoidance of phrasal verbs: The case of Chinese learners of English. *Language Learning*, 54 (2), 193-226.
  - \* Nassaji, H. (2003). L2 vocabulary learning from context: Strategies, knowledge sources, and their relationship with success in L2 lexical inferencing. *TESOL Quarterly*, 37(4), 645-670.
  - \* Nation, I.S.P., & Beglar, D. (2007) A vocabulary size test. *The Language Teacher*, 31(7), 9-13.
  - \* Neagu, M. (2007). English verb particles and their acquisition: A cognitive approach. *RESLA*, 20, 121-138.
  - \* Negishi, M., Tono, Y., & Fujita, Y. (2012). A validation study of the CEFR levels of phrasal verbs in the English vocabulary profile. *English Profile Journal*, 3, 2-16.
  - \* Palmer, F. R. (1965). A linguistic study of the English verb. Longman.
  - \* Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1972). *A grammar of contemporary English*. Longman.
  - \* Yasuda, S. (2010). Learning phrasal verbs through conceptual metaphors: A case of Japanese EFL learners. *TESOL Quarterly*, 44(2), 250-273.
  - \* 飯尾豊(2013)「コーパスを用いた日本人学習者の句動詞の使用に関する研究」『熊本大学社会文化研究』11, 35-53。
  - \* 石井康毅(2018)「話し言葉コーパスと検定教科書に基づく日本人英語学習者の句動詞使用実態の分析」『Learner Corpus Studies in Asia and the World』3, 101-119。
  - \* 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』東京:くろしお出版
  - \* 神戸大学附属幼稚園・附属小学校(2018)「幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子どもの学びに着目した、幼児教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる『初等教育要領』の充実」最終閲覧日2021年2月19日;  
<http://www.edu.kobe-u.ac.jp/hudev-akashie/4.kenkyu/h31/H29%20jisshihoukokusho.pdf>
  - \* 小宮あすか・布井雅人(2018)『Excelで今すぐはじめる心理統計』東京:講談社。
  - \* 小屋多恵子・下山幸成(2008)「日本人英語教師のコロケーション容認度—『国際語』としての英語の中で」『Dialogue』7, 1-15.
  - \* 櫻井大暉(2018)「難易度別英語教科書6種の計量的教材研究」『文学研究論集』49, 1-17.
  - \* 投野由紀夫・根岸雅史(2020)『教材・テスト作成のためのCEFR-Jリソースブック』東京:大修館書店。
  - \* 中川右也(2018)「帰納的句動詞学習の設計—認知言語学的知見に基づいたアクティブラーニング型授業への試みー」『教科開発学論集』(愛知教育大学・静岡大学)6, 59-75.
  - \* 文部科学省(2017)「平成29年度 英語力調査結果(高校3年生)の概要」最終閲覧日2021年2月19日;[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470\\_03\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf)
  - \* 文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領(平成30年告示) 外国語編 英語編』東京:開隆堂出版。

## コーパス

Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian learners of English. *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 1, 91-118.

## ソフトウェア

Anthony, L. (2019). AntConc (Version 3.5.8) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University: <https://www.laurenceanthony.net/software>

## \* 辞書

安藤貞雄(2011)『三省堂 英語イディオム・句動詞大辞典』東京:三省堂。